

# 観光まちづくりを 取り巻く現状と可能性

## 観光まちづくりに至る動き

近年、観光に対する我が国の期待は高まっており、官民をあげて観光振興に乗り出している。その中で近年注目されている考え方が「観光まちづくり」である。しかし、この言葉が意味するところは、一見まとも

っているようでとても多様であり、その輪郭はやや曖昧である。「観光まちづくり」を端的に整理すれば、観光からまちづくりに向かう動き(従来型の観光形態が頭打ちをみせており、新しい観光の方向性を模索する中で、「まち」が新たな観光のコンテンツとして可能性を有している)、および、まちづくりから観光へ向かう動き(まちづくり自体も単独ではなかなか進まない中で、「観光」という力を起爆剤として、あるいは、外部資本を活用する)という

二つに帰結するのだが、実態はもう少し複雑である。観光「から」まちづくりを「用いて」、もしくは、まちづくり「から」観光を「通して」といったような、与条件と手段だけでなく、目標が観光であるか、まちづくりであるかで、さらに整理される(表1)。

しており、両者のバランスを考えないわけにはいかない。つまり、もとも観光まちづくりを抱えているまちも多く存在するのである。

そもそも、「観光」と「まちづくり」は必ずしも並列的な言葉ではなく、観光自体がまちづくりの一部であるとも考えられる。宿場町や温泉街では、まちの成立ちからして観光を内包しており、まちづくりの中で観光が実践されるのは必然でもある。逆に言えば、ここで観光を推進する主体は、その地の住民でもあり、観光と共にまちづくりを実践するの

もまた必然である。あるいは、都市観光を考えてみても、人の集まる都市では、都市生活と観光資源は混在しており、両者のバランスを考えないわけにはいかない。つまり、もとも観光まちづくりを抱えているまちも多く存在するのである。

り遅れた結果、守るべき資源や資産が残ってしまった、いわゆる「周回遅れのトップランナー」達でもある。

な観光は、温泉街やこれを取りまく環境全体を対象とする面的な観光へと移行しつつある。温泉地に限らず、多くの観光まちづくり事例において、こうした枠組みの拡大が試みられている。

このように、観光まちづくりを巡る現状はやや複雑ではあるが、ここで、我が国における観光まちづくりの方向性と可能性について、改めて整理してみたい。

## ■点的資源から面的町並みへと観光の枠を広げる試み

①温泉街の面的ツーリズム…単体の史跡・名勝・資源を団体客が観光バスで飛び飛びに巡り、最後は旅館で宴会……という画一的な観光から、個人や少人数で多様なコースを巡る観光へとそのニーズが移行しており、提供側としても対応が求められる。黒川温泉の入湯手形、別府温泉の別府八湯温泉泊覧会による体験プログラム、銀山温泉の足湯をはじめとした散策できる環境整備や環境活動など、施設の開放、整備、協力的制等を通して、各旅館による閉鎖的

②ミュージアム・ツーリズム…我々が欧米の諸都市を訪れるときの観光行動の一つに、「美術館・博物館巡り」があるが、なかなか美術館を巡る余暇形態が、日常生活の中に浸透しない我が国でも、点在・集積するいくつかの美術館を通してまちなかを巡る「ミュージアム・ツーリズム」とも呼ぶべき動きが生まれている。近年話題の大きな美術館が集積した「六本木アート・トライアングル」、島を取り巻く自然や町並みにまで広がって展開している「ベネッセアートサイト直島」、地域の作品を、地域の町並みや邸宅の中に展示する「小さな美術館めぐり」の筑後吉井(うきは市)、まちの中に散らばる小さなアート活動が結びついた「art-「三上野谷中」など、多様な動きが各地で展開されている。

③ゆかりのツーリズム…作家や文学作品、マンガなどの「ゆかりの地」巡りが盛んである。文人の多く住んだ本郷界隈(文京区)や、「坊ちゃん」や「坂の上の雲」の舞台松山など、作品ゆかりの地を巡ることで、作家が暮らした日々や、作品に投影されたまちの風景を通して、広がりあるまちの魅力をうまくとらえることが可能になる。あるいは、「フィルム・ツーリズム」と言うべき、映像作品を題材とした観光が実践されている。大林宣彦監督による三部作「有名な尾道、映画『Love Letter』で有名アジアを中心とした海外客も魅了する小樽、ドラマ「北の国から」の富良野など、ロケ地観光が盛り上がりを見せるとともに、「フィルム・コミッション」と呼ばれる、ロケ誘致を核としたまちづくりが話題となっている。映画を通して、まちの魅力が発信されるだけでなく、映像で見ていた風景が目の前に広がることから、間接的に観光客の増加も見込まれる。しかし、そこには、映画に取り上げられるだけの魅力の存在が大前提であり、この魅力的な風景を維持するために、まちづくりが

必要となる。一方、地域で映画祭のようなイベントを開催することで、映画という媒介を通して、とっつきにくいまちづくりに若者を積極的に参加させる試みも行われている。

④ナイト・ツーリズム…夜景の美しい町では、ライトアップによるまちづくりも進んでいる。夜景は、まち全体が一体となって生み出す風景であり、その対象がまち全体に広がるため、観光まちづくりを実践するのに適したコンテンツである。長らく夜間景観整備を積み重ねてきた門司港や、一連のライトアップによるまちづくりを推進する函館、夜間景観のコントロールに取り組む金沢、天台のあるまちで盛んな「星空の見えるまちづくり」など、余計なものに際立つ灯りが、観光とまちを結びつける。また、阪神・淡路大震災犠牲者の鎮魂の意を込めながら、都市再生への夢と希望を託して1995年から実施されてきた神戸ルミナリエでは、その美しさによって観光資源へと成長し、その評価がまた市民の元気の源となった。

表1 観光まちづくりにおける4分類

タイプ	現状(から)	手段(を用いて)	目的(へ)	概要
タイプ1	観光	まちづくり	観光	従来型の観光地がこれまでの形態では立ち行かなくなり、コンテンツとして、まちづくりを含めた新たな観光スタイルを模索する。
タイプ2	観光	まちづくり	まちづくり	観光地も持続的な居住地の一つであるという地域の側に立って、生活と観光の調和を図りながら、持続再生型の観光地をめざす。
タイプ3	まちづくり	観光	観光	祭りや地域文化を大事にした結果、外部から多くの人が訪れるようになったため、交流を含めた地域活性化に役立てようとする。
タイプ4	まちづくり	観光	まちづくり	観光客や来訪者の視点をうまくとり入れ、地域の魅力や方向性を考えながら、観光と地域のまちづくりを動かすキッカケとする。

## ■「大きなもの(自然・環境)」を愛でる観光

昨今の観光ニーズとして、自然環境や生態系といった、「大きなもの」が脚光を浴びている。近年人気の高いグリーンツーリズム・エコツーリズム・アグリツーリズムといったものは、周りにある自然や環境全体を合わせて資源として捉える観光形態である。同時にこれらは、ただ見るだけでなく、自然に触れたり、農業をしたりといった、体験型観光として人気を博している。こうした美しい農村風景や自然環境を活用するには、地域全体を一つのものとしてとらえ、環境の保護と適正な観光によって、地域振興を図るという考え方が必要である。そのため、単純な観光的側面以上に、地域との関係、そして、これを保つための観光客への学習・教育やガイドの育成という部分にも力が注がれる。安心院(大分県)をはじめとする民泊やグリーンツーリズムは、地域の民家の協力をもとに展開されている。屋久島(鹿児島県)で行われているエコツアー

ズムでは、屋久島観光をコントロールする屋久島ガイドを育成し、しかもこれが地域になじむよう、地元で2年以上居住することを条件に求めるなど、地域との関係を重視している(外部からの希望者も多いガイド自体も、ある種の教育対象である)。

## ■ストーリーがつくる観光まちづくり

近年の世界遺産登録や、文化的景観を始めとした歴史的資産の総合的保全における傾向でもあるが、一見するとビジュアルにはその魅力がわかりにくい対象物件が増えている。これらは、奥にある地域・文化・歴史・資源の総合的な体系、いわば、ストーリーを含めて体感することで初めて魅力が現れるのだが、このストーリー作りこそが、まちづくりそのものに他ならない。昨年、世界遺産登録された石見銀山は、間部とよばれる鉱掘だけでなく、銀の天領支配のための代官所と武家屋敷、商いでにぎわう町屋や郷宿の町並み、銀を運ぶ街道と積出港、鉱山でありながら保たれる緑豊かな自然環境など、銀山をとりまく一連のシステム

全体がその対象となっており、このシステムを理解してはじめて観光客はその風景の大切さに気付く、地元も何を守るべきかに気付く。

一方、ストーリーを理解してもらうには、語り部が必要となる。趣向の凝らしたマップやルート設定、ストーリーに基づいたツアーも手助けとなるが、やはり、地域住民の存在が、観光と地域の距離を縮めてくれる。喜多方市(福島県)のまちなかを走るペロタクシー(自転車タクシー)は、観光交通として興味深いだけでなく、地元発のドライバーによる奥深い説明と独自のルート、観光客のニーズへの細やかな対応により、「通」の観光が可能になる。また、各地で盛んな、地域住民自ら行うボランティアガイドの育成は、語り部をまちじゅうに増やすとともに、観光を受け入れる地域側の体制づくりとしても重要になる。

## ■「生活」を観光コンテンツとする試み

「本物」志向の現在の観光ニーズにおいては、地域の飾りのない暮らしや、独自に築かれた暮らしの知恵

に触れることこそ本物の観光であるという考え方が広がっている。湯布院温泉街などの生活型観光地や、水を用いた静かな地域文化の根付いた郡上八幡などでは、淡々と毎日暮らしその姿こそが魅力であり、まち全体に、どこか凛とした背筋の伸びるような空気がある。同時に、これらは、生活と知恵があるまちならどこでも観光対象になりうることを示している。こうした飾りのない魅力を来訪者が堪能するためには、観光振興以上に、日々の暮らしを損なわないための適正な観光スタイルを構築する必要がある。

## ■「観光コントロール」としての観光まちづくり

魅力あるまちづくりを積み重ねてきた結果、否が応でも人が「来てしまおう」こともある。かといって、まちは、ある種の公共財でもあり、来訪を拒否することも難しい。そこで、観光をうまく使って両方おさめる方法論、つまり、「観光化しないために観光すること」が必要となる。前述の石見銀山では、世界遺産登録に

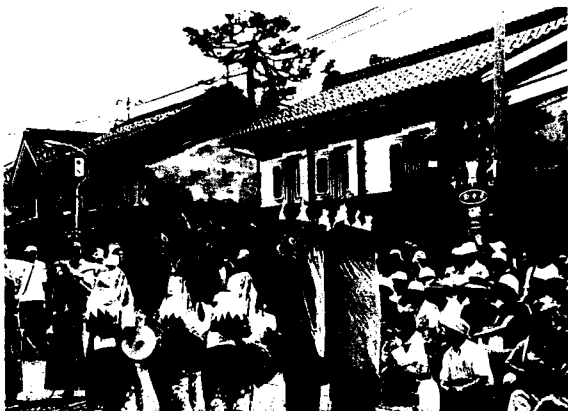
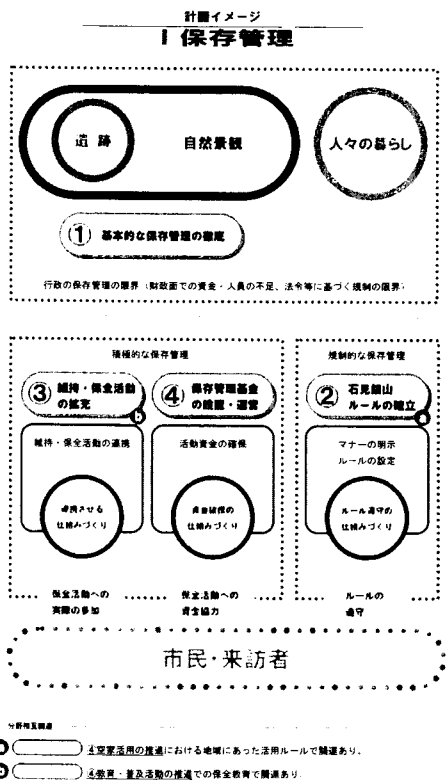
図1 「石見銀山行動計画」  
(石見銀山協働会議、2006年)

# 石見銀山 行動計画

石見銀山を未来に引き継ぐために

平成18年3月12日

石見銀山協働会議



「蔵してる通りフェスティバル」の風景

際して、官民協働により立ち上げられた「石見銀山協働会議」において、1年がかりの議論を経て、「石見銀山行動計画」が立てられた。この計画に沿って、例えば、住民自ら観光ボランティアをしたり、駐車場の配置戦略を検討するなど、まちの本質を失うことのないような観光形態、そして、来訪者と市民がともに、より深くまちを知ることのできる仕掛けがなされており、観光の中に上手にまちづくりを取り入れて、観光コントロールを実践している(図1)。

一方、観光単一型の商店街は、人気が出ると成長も著しいが、その分、一度人気なくなると凋落も激しい。持続再生型の観光開発を実現するには、まちづくりとの連動を必要とする。例えば、川越一番街商店街を見てみると、観光向け店舗と生活向け店舗のバランスがとれており、そのバランスによって単なる一時的な観光商店街化が抑えられている。

## ■「地域発」イベントから広がる観光まちづくり

元々は地域の神事や、コミュニテ

イ内の娯楽だったもの、あるいは、地元で祭りを自ら開催し、自分たちで楽しんでいたところに、次第に多くの見物客が集まり、結果として観光となる場合がある。当然、祭りの魅力は、その地域独自の祭りの姿にあり、これを維持するために、背後にある地域文化やコミュニティの維持が不可欠である。

一方、新しい賑わいを求めてイベントが創出されることもある。よさこい祭りに刺激を受け、これに自らの文化であるソーラン節を加えて生

また、YOSAKOIソーラン祭り(札幌市)をはじめとして、単なる商店街振興や、観光振興という目的を超えて、自分たちが楽しむために、外部との交流を積極的に受け入れることで、大きなイベントへと成長するケースが見られる。

また、村上市(新潟県)をはじめとして全国各地に広がっている「ひな巡り」のように、地域、あるいは各家の中に眠っている資源をほりおこしてこれを用いてまちを巡るイベントとする動きがみられる。地域のポテンシャルを発信して観光へと展開している事例である。

喜多方市小田付地区(福島県)では、地域のまちづくり団体(会津北方小田付郷町衆会)を中心として、「蔵しての通りフェスティバル」というイベントが開催されている。主に周辺住民を対象とした手づくりのイベントではあるが、市内の下柴彼岸獅子の演舞(重要無形文化財)から大極拳に至るまで、地域の誇るべき文化が、誇るべき空間である蔵の町を通して発信される、「地域発」イベントである。こうしたイベント

では、逆に観光客が多すぎることで破綻をきたすこともあり、規模の適正化が求められる。

### ■滞在型の観光まちづくり

単に資源を眺めるだけでなく、地域との交流を深め、地域の魅力を理解し、観光客に地域への(経済貢献も含めた)貢献をしてもらうためには、滞在時間を伸ばしてもらう工夫が必要である。グリーンツーリズムの中で行われている「民泊」や、町家をまるごと短期間賃貸する京町家ステイ事業(京都)など、地域の生活文化とつながる形での宿泊提供や、旧四賀村(松本市)や妙高市、笠間市(茨城県)などで行われている簡易宿泊施設付の滞在型市民農園も、農業や自然のよさを体感するための滞在型の仕掛けである。

中長期滞在により、じっくりと地域の本質に触れる観光形態も可能性を秘めている。都市部と農村部と両方に住居を持ち、都合に合わせて両者を往来する、2地域居住者や交流居住者は、観光客と地域住民との中間に位置する存在として、双方の理

解者となりうる。

また、アーティストが3カ月間、市内の町家をアトリエとし、市民の家等に滞在して、地域伝統の和紙を用いた創作活動を行う美濃市「紙の芸術村」(岐阜県)をはじめとして、職人やものづくりに携わる人々の中長期滞在を誘致するアーティスト・イン・レジデンス事業が各地に広がっている。これ自体が交流居住でもあるが、さらに彼らが体験観光を担ったり、商品を販売したりすることで、体験型交流人口としての観光客をひきつけるという、2層構造の観光まちづくりとなる。「越後妻有アートトリエンナーレ」では、美しい農村風景と野外におかれた芸術作品、長期滞在型のアーティスト、ともに参加する地域住民、これらを見に来る来訪者というような重層的な広がりが見られた。

一方、外国人バックパッカーに目をつけた観光まちづくりの動きもある。山谷地区(台東区・荒川区)、寿町地区(横浜市)など、かつてドヤ街と呼ばれた簡易宿泊施設街では、その対象を日雇い労働者から、人とおれあい、体験のできる施設とした。これが、観光客の増加とともに、提供する工芸品やその材料、農産物の生産拡大に広がった。

④インダストリアル・ツーリズム  
「産業観光」とは、産業遺産や操業中の工場などを通してものづくりの原点に触れるものであるが、富岡製糸場の絹産業を中心とした近代化遺産群(富岡市)や、新居浜市での別子銅山を中心とした鉱業観光のよ

うに、かつての産業遺産を眺めるだけでなく、現在操業中の工業を見る事を通して、現在のものづくりの技術、あるいは普段生活で目にする製品の出自を感じるものへと広がりを見せている。

愛知県では産業博物館(トヨタ産業技術記念館・ノリタケの森等)といくつかの工場でネットワークを結び産業観光モデルコースを設定している。えひめ東予産業観光施設連絡会でも、四国北側の範囲での広域的なネットワークを利用した広範囲の産業観光が実現している。こうした動きが、例えば、大田区や下町(東京)にある数々の町工場へと広がれ

安宿を求める外国人宿泊客へと抜けつつある。日雇い労働者の高齢化が進み、空き家も増加する一方で、安宿を求める観光客のニーズと合致したためである。こうした動きをきっかけとして「まちの再生」を目標に活動が活発化している。

### ■ものづくりを支える観光まちづくり

「ものづくり」と「生活」とがやや離れつつある現在、製品が一体どのような過程を経て自らの手に渡ってきたのか、「見えない交換」に不安を覚える消費者も多い中で、ものづくりのプロセスとその背後にある文化・地域・歴史を実際に見て、体験するという行為が観光化されつつある。

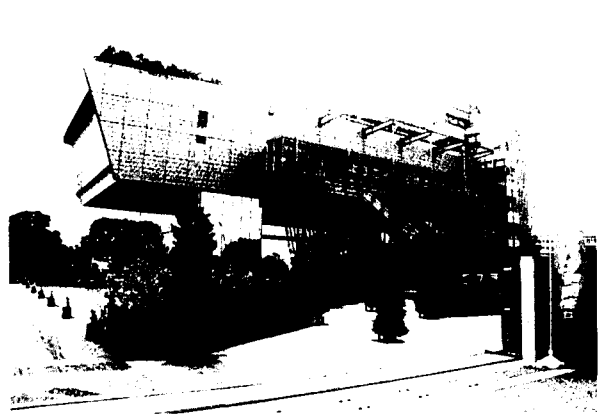
①食のツーリズム  
宇都宮の餃子、喜多方のラーメン、呼子のいかなど、地域独自の食材や料理を用いた食のツーリズムの実践は増加傾向にある。地元もおいしいと認め、生活に溶け込んでいるものであれば、地域の味として来訪者にとっても魅力的であるが、さらに、地産の食材を活かすことで、観光と産業(農業)が

ば、工場を歩きながら巡る新たな観光ルートが生まれるとともに、地域独自の「ものづくり再生」への契機ともなりうる。

また、近代日本を支え続ける空間である臨海工業地帯も観光まちづくりの対象となる。京浜工業地帯には、多くの工場群とともに、見学施設(トウイニー・ヨコハマ・東京電力)や展示施設(環境エネルギー館・東京ガス、写真)などの多くの産業観光施設が見られ、今後ネットワークが期待される。また、草の根活動としては、あまけん(尼崎南部再生研究会)が実施した尼崎運河クルージングが好評を博すなど、存在感のある大きな煙突やタンク、繊細な産業芸術であるクレイソンなど、ダイナミックで魅力的なその風景は観光資源としても十分に通用するとともに、こうした産業空間に交流人口を求め、都市空間の一部としてまちづくりの新たな対象となりうる。

### ■まちなか観光(アーバン・ツーリズム)

書店には、これまで注目されなかつたような、いわゆる「まちあるき



工業地帯に佇む「東京ガス環境エネルギー館」

近づくこととなり、その意義も深くなる。また、消費者としては、安全な食材や生産を自分の目で確かめるために観光するといった、安全と観光との融合も進んでおり、そこに、小岩井農場等が今でも人気の観光地として名高いこと理由が見え隠れする。

ための新たな仕組みづくりとしてアグリ・ツーリズムを利用する動きもある。例えば、飯田市のワーキングホリデーでは、「無償援農システム」(無償労働の対価として、宿泊食事付の田舎暮らしを提供する)が実施され、西米良型ワーキングホリデー(宮崎県西米良村)では、村の施設に宿泊しながら、数日は働き、数日は田舎を楽しみ、労働対価は報酬として支払われるという有償の仕組みとなっている。また、大山千枚田を始め、各地で実施されている棚田オーナー制度でも、都市住民が地元自治体・農協を通じて棚田を有償で借り上げ、田植え稲刈りを通じて交流を図るなど、単なる体験を超えたま

ち・あるいは農業への還元が同時に求められている。

③手工業の観光まちづくり  
ものづくりが、都市と地方を結ぶカギとなる場合もある。例えば、「たくみの里」(群馬県みなかみ町)では、都市農村交流を目指して、地域に眠る伝統的手工芸や地場の食作りを基に、町民でもある職人の工房「たくみの家」を整備し、観光客が直接職

本」が並んでおり、昨今のまちあるきブームは、「まち」が十分に観光のコンテンツになりうることを現している。中でも、まちなか観光（アーバン・ツーリズム）と呼ばれる動きが注目されている。例えば、まちなかには、都市に暮らし、集まり、都市を楽しむ人々の普段の生活が集まっており、これが、お化粧の多い観光地とは違った、素の魅力を醸し出す。また、都市観光では、同じ場所でもさまざまな解釈や多くのストーリーが積み重なっているため、何度訪れても新たな発見が生まれてくる奥深さがある。石畳の路地と料亭を始めとした潤いある町並みが魅力の神楽坂、寺町・門前町・屋敷町の魅力が集まる谷根千（谷中・根津・千駄木）、路地と若者の賑わいがマツチした下北沢や吉祥寺など、暮らしと賑わいが混じりあうまちならどこでも、アーバン・ツーリズムが楽しめる。まちあるきというツールを用いて、まちじゅうに数十のまちあるきルートを設定し、まちあるき自体を博覧会としてしまった長崎「さるく博」の人気は、観光目的で

何かを飾り立てることもなく、日々の積み重ねの結果としてそこに存在している都市の魅力と、これを巡るまちなか観光の意義を示している（図2）。

また、自分たちのまちを自分たちで知るためのまちあるき「タウン・トレイル」という動きもある。自分たちのルーツを知るために、地元を巡るものである。何度も何度も地元を踏みしめて歩けば、新たな発見は絶えない。

ちなみに、都市部では、多様な主体が並存しており、観光としてもまちづくりとしてもなかなかまとまらないことも多い。千代田区では、千代田さくら祭り（主催：千代田観光まちづくり実行委員会）と称して、これまで個別に行われた花見という行為を、桜の見学をルート化し、周辺の店舗が協力することで、花見による観光まちづくりへと昇華させている。

### ■気軽に行う日常観光、自分を知るタウン・トレイル

これまで日常観光では、非日常の賑わいや静けさを求め、日常の喧騒から切り離されることが求められていたが、刺激や情報も氾濫する中で、むしろ、日常の中のゆとりや落ち着いた暮らしの中にある小さな魅力に目が向けられている。緑やオープンスペースとうまく織り重なった心

これまで日常観光では、非日常の賑わいや静けさを求め、日常の喧騒から切り離されることが求められていたが、刺激や情報も氾濫する中で、むしろ、日常の中のゆとりや落ち着いた暮らしの中にある小さな魅力に目が向けられている。緑やオープンスペースとうまく織り重なった心

### ■「シーニックバイウェイ」の観光まちづくり

地よ生活空間は、気軽に何度でも訪れたくなる「日常観光」の場所となる。こうした場所は、結果として来訪者をもひきつけるとともに、無理な観光振興を必要としない、軽やかな観光スタイルとなる。「湘南スタイル」「世田谷ライフ」など、地域生活に焦点をあてた雑誌も出版されており、日常観光へのニーズが伺える。

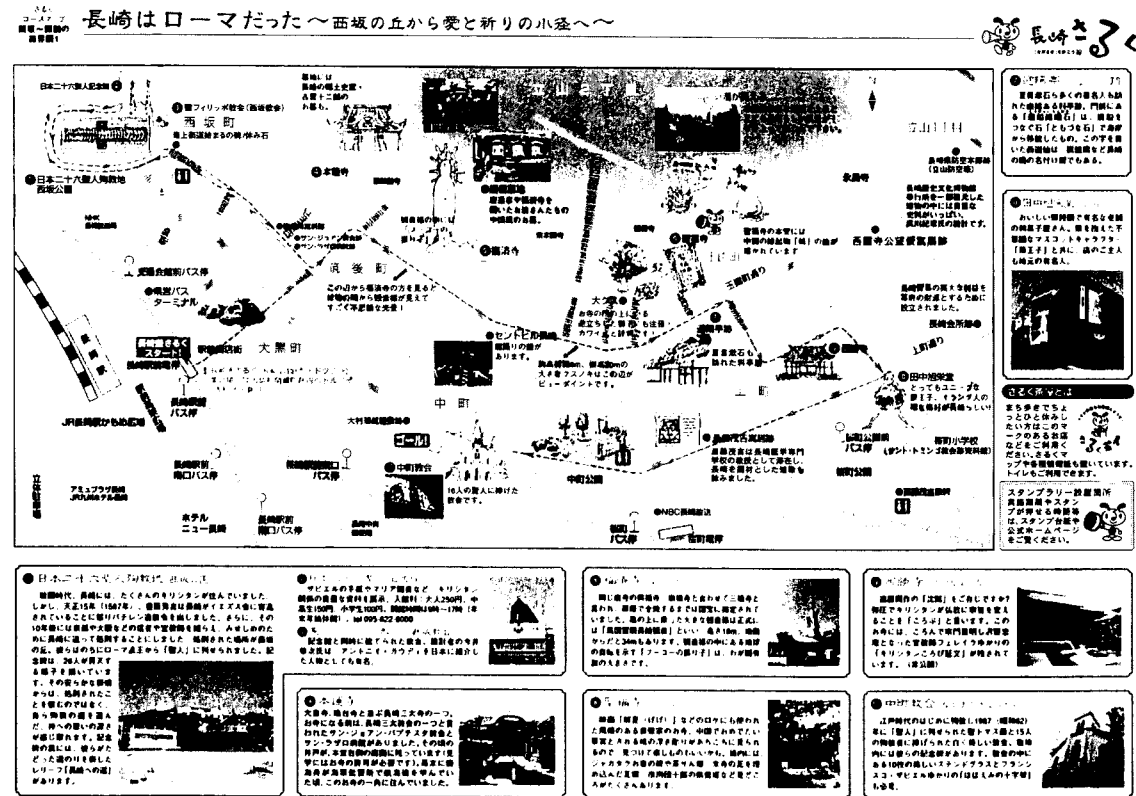
観光的な側面からみて道路は、これまで、観光地へのアクセス、あるいは点と点を結ぶリンクにすぎなかったが、近年の個人観光・ドライブ観光など、観光形態の多様化に伴って、点と点（図）の間の移動空間（地）も観光資源として捉えるという見方が必要とされている。この場合、道路沿いの風景全体が観光資源であるとともに、これらの風景を作り出すのは、沿道の地域住民であることから、地域のまちづくり活動を支援することが結果的に風景、ひいては道路の意義につながるという新しい考え方である。道路沿いに魅力的な風景が多くつながる北海道や四国を始め、全国的に検討されている。

### ■小さな単位からの軽やかな観光まちづくり

市町村合併など、自治のまとまりが流動的な現在、小単位（十数戸、1集落など）で行われる観光まちづくりに可能性が見出せる。田舎の小集落では、大事業が起きたり、劇的

に発展したり、全く知らない人が急増することが少ないため、軽やかに来街者の流入（観光）を捉えていることが多く、地域づくりを楽しむために、観光を上手に活用している。小さな単位での独立採算に向けて、宿泊、体験、飲食などを利用して、自分がまちで事業を動かすことが元気の源であり、そこには、観光とか生活とかいう分け隔てもなければ、大きな命題もない。自分たちが生き生きと暮らすために必要なものを利用してはならない。観光でさえも、楽しく暮らす道具であり、それ以上でもそれ以下でもないのである。智頭町新田（鳥取県）では、十数戸の集落が全戸まるごとNPOとなり（NPO法人「新田むらづくり運営委員会」）、都市との交流事業等を行いながら田舎暮らしを楽しんでいる。旧土佐山村中川地区（高知市）では、個人の活動による「梅まつり」に始まり、住民の計画を基にした本格的なホテル（オーベルジュ土佐山）を核としながら、住民出資の会社により直売所経営や景観整備を行うなど、住民自ら集落経営を実

図2 「長崎さるくさるくコースマップ」。ルートの設定、解説、マップの作成まで、市民の手で行われた。



践している。旧大野村（岩手県洋野町）では、各地域に建設された工房（農産物加工施設）を地域住民が運営しながら、これを用いた地域づくりを進めている。

このように、観光まちづくりの可能性を並べてきたが、枚挙にはいとまがない。いずれにせよ、これからの観光まちづくりに共通するのは、観光産業として無尽蔵に活性化を求めるモデルから、適正・適量を維持する持続再生型のモデルへの転換が求められているということである。そして、最後に、観光まちづくりは、どのまちにおいても適応しうる考え方であると同時に、その町に合った独自の議論を考える必要があるということをおきたい。

### ■参考文献

- 都市観光を創る会監修、都市観光でまちづくり編集委員会「都市観光でまちづくり」、学芸出版社、2007年6月
- 佐々木一成「観光振興と魅力あるまちづくり」、学芸出版社、2008年2月
- 西村幸夫「西村幸夫風景論ノート 景観法・町並み・再生」、鹿島出版会、2008年3月